

ラカンのシェーマLについて

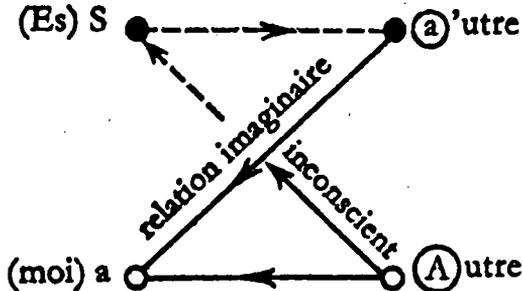
大西 宗夫

(人文学部仏文学研究室)

“ Sur le schéma L de Lacan ”

Muneo OONISHI

ジャック・ラカンは、その教育活動の全期間を通じて、さまざまなシェーマや算式を活用した。シェーマLと名付けられたZ型の図式は、それらのうちでも最初のものであり、もっとも基礎的なものであるといえる。この小論では、このシェーマLについて考察してみたい。まず問題になっている図式を掲げよう¹⁾。



このシェーマLについて、ラカンの主著である『エクリ』にももちろん説明はのっているが、全24巻の刊行が予告されているセミナーのうち、既に刊行されている第二巻『フロイトの理論と精神分析の技法における自我』と第三巻『精神病』とにはるかに詳しい解説がある。それを参考にしながら作業を進めたい。

Notre schéma (...) figure l' interruption de la parole pleine entre le sujet et l' Autre, et son détour par les deux moi, a et a', et leurs relations imaginaires.²⁾

naires.²⁾

(...) il n'y a pas seulement dans la situation analytique deux sujets présents, mais deux sujets pourvus chacun de deux objets qui sont le moi et l'autre, cet autre ayant l'indice d'un petit a initial.³⁾

最初の引用文では、aとa'が「ふたつの自我」と呼ばれ、後の引用文ではそれが、「自我と他者」と言われている。またシェーマLには「ふたつの主体」が存在していると書かれているが、ふたつの主体とはSとAのことである。S、a-a', Aの各項ごとに取り上げていこう。

まずシェーマの左上にある大文字のSであるが、Sは主体 (sujet) であり患者 (sujet) でもあり、さらにフロイトの局所論におけるエス (Es) でもある。主体とエスが同じSという一文字で

表わされることによって、人間存在における主体性は、デカルト以来の哲学的伝統が考えてきたように意識=コギトもしくは自我にあるのではなく、無意識的存在であるエスにあるのだということが主張されているのである。

つぎに図の右上から左下へ想像的關係という矢印で結ばれている $a-a'$ であるが、これはどちらも *〈autre〉* の頭文字である。のちに出てくる大文字の他者 A と区別して、小文字の他者と呼ばれるけれども、同時に自我のこともである。ラカンは「あらゆるナルシズム的關係において、自我は他者であり、他者は自我である」(Dans toute relation narcissique, en effet, le moi est l'autre, et l'autre est moi⁴⁾) と述べているが、このことを理解するには、ラカンの有名な鏡像段階の理論によらねばならない。

鏡像段階とは、鏡を前にしたときの幼児の反応の考察から生まれた概念である。例えば、私には現在生後四か月になる女兒がいるのだが、この子を抱いて鏡の前に立つと、娘は鏡にうつっている私の眼をじっとみつめる。しかし鏡の手前で彼女を抱いている私の方を振り向こうとはしない。このとき娘にとって、鏡の中の私の像は実在の私という意味をもっているのである。このように、鏡像を実在の対象とみなすのを鏡像段階の第一ステップとすると、つぎの段階は、像を像として認めることである。チンパンジーはこまでは発達するのであるが、それ以上の進歩はみせない。チンパンジーは鏡にうつっている像が生きていないことを確かめるとすぐに興味をなくすのである。そして、人間だけが次の段階まで進み、鏡の中の像を自己の像として認知する。これは生後6か月から18か月の幼児にみられる現象であり、そのとき幼児は歓喜にみちた表情で鏡にうつった自分の姿を引き受け、それに魅了される。⁵⁾

Cet événement peut se produire, on le sait depuis Baldwin, depuis l'âge de six mois, et sa répétition a souvent arrêté notre méditation devant le spectacle saisissant d'un nourrisson devant le miroir, qui n'a pas encore la maîtrise de la marche, voire de la station debout, mais qui, tout embrassé qu'il est par quelque soutien humain ou artificiel (ce que nous appelons en France un trotte-bébé), surmonte en un affaiblement jubilatoire les entraves de cet appui, pour suspendre son attitude en une position plus ou moins penchée, et ramener, pour le fixer, un aspect instantané de l'image.⁶⁾

この時期の幼児は、「出生時の特異な未熟性」(prématuration spécifique de la naissance⁷⁾) のために、自分の身体を自由にあやつることもできず、無力で口もきけない (infans⁸⁾)。また統一された身体のイメージをまだ獲得していず、「ばらばらに寸断された身体」(corps morcelé⁹⁾) の空想に支配されている。しかし、鏡にうつった自己の像に同一化することによって、一挙に成熟を想像的な仕方で行き取りするのである。この想像的同一化が、のちのすべての同一化の基礎であり、自我が発生してくるのもこの同一化によってである。

ここで注意しなければならないのは、鏡にうつった像は、たとえ自己の像であっても、自己自身そのものではないのだから、自己にとってはひとつの他者というべきだということである。そして自我は、この他者に同一化することによって形成されるのだから、それ自体、本来的に他者であるといえる。想像的・ナルシズム的關係のうちでは、自我と他者の区別は存在していない。そこで、シェーマLでは、ふたつの自我は *〈autre〉* の頭文字をとって、 a と a' と表記されているわけである。¹⁰⁾

想像的關係においては、自我は他者であり、他者は自我であることをよく示す例として、トランジティヴィズム (transitivisme) とよばれるものがある。ふたりの幼児が遊んでいて、一方の幼

児がもうひとりの方をなぐり、自分になぐられたとって泣き出すというような現象だが、ここでは幼児は嘘をついているのではなく、幼児はまさに他者なのである。

Ce qui se passe entre de jeunes enfants comporte ce transitivity fondamental qui s'exprime dans le fait qu'un enfant qui en a battu un autre peut dire — l' autre m'a battu. Non pas qu'il mente — il est l' autre, littéralement.¹¹⁾

想像界とはイマージュの支配する領域である。ラカンは想像界について論じるとき、たびたび比較行動学 (éthologie) や動物心理学 (psychologie animale) をひきあいに出す。たとえばハトの生殖腺の成熟において像 (image) が果たす役割りについてラカンは次のように書いている。

la maturation de la gonade chez la pigeonne a pour condition nécessaire la vue d'un congénère, peu importe son sexe, — et si suffisante, que l' effet en est obtenu par la seule mise à portée de l' individu du champ de réflexion d' un miroir.¹²⁾

動物は本能に導かれ、本能は像 (image) に導かれる。そういう意味で、動物は想像界そのものを生きているといえよう。人間においても想像界は重要な機能を果たすが、ただ人間の想像界は象徴界によってすみずみまで浸透され再組織されている点で、動物とは異なるのである。

最後に取り上げなければならない、シェーマの右下にあるAは、象徴界の他者を表わしている。Aは大文字の他者 (Autre) の頭文字である。象徴界の他者という意味は、a-a' という小文字の他者が結ぶ想像的関係の外部に存在する第三者としての他者ということである。ここでは、小出浩之が『シニフィアンの病い』というラカン論で述べている「他者一般」というのがラカンのAと共通する部分が大きいので、それを引用しよう。

人は絶対的なものに思春期に初めて遭遇する。(…) 子供の行為は具体的・個別的他者へのみ向けられたもので、たとえその場に具体的他者がいなくても、そこに暗に想定されているのは、例えば両親とか先生とか友人達という具体的他者にすぎない。子供はある行為をするにしろしないにしろ、それは親に叱られるからとか、級友に笑われるからとかであって、決して世間一般に対してとか、人間としてどうこうとかいうような一般的・超越的なものを想定しているわけではない。これに対し大人の行為は常に他者一般に向けられている。その他者一般は、具体的な形としては世間という世俗的なものであったり、人倫という道徳的なものであったり、場合によっては宗教的なものこともある。いずれにしても大人の行為は単なる具体的・個別的他者を越えた超越的な他者一般へと向けられている。思春期とはちょうどこの大人と子供との中間の時期であり、具体的・個別的他者の背後に他者一般が見えてくる時期、即ち他者が他者一般を担って現われてくる時期である。したがってまた、思春期は人が超越性に出会う時期でもあり、神、永遠、無限、自由、抽象へと目覚める時期でもある。一方自己という側面については、子供の自己はいわばその都度その都度のものであって、抽象的な自己自身なるものは子供には存在しない。他者一般に出会うということは抽象的自己なるものを照し出され、自己の存在根拠を問われることでもある。¹³⁾

引用が長くなったが、ラカンのAとはおよそどういうものであるのか理解できたのではないだろうか。

これでシェーマLの各項を明らかにしたから、最後にシェーマ全体の意味について考えておこう。

A—Sはパロールの通路であるが、Aから発せられたパロールはSに到達する前に $a-a'$ の想像的關係によって抑圧され無意識を構成する。精神分析がめざすのは、AとSが直接的に結ばれ、充実したパロール(parole pleine)の關係が可能となるようにすることである。そのためには分析医は、患者Sに対してAの位置を占め、 $a-a'$ の想像的關係の畏に巻きこまれることを極力避けなければならない。

Si on veut placer l'analyste dans ce schéma de la parole du sujet, on peut dire qu'il est quelque part en A. Du moins, il doit y être. S'il entre dans le couplage de la résistance, ce qu'on lui apprend justement à ne pas faire, alors il parle depuis a' , et c'est dans le sujet qu'il se verra. Cela se produit de la façon la plus naturelle s'il n'est pas analysé—ce qui arrive de temps en temps, et je dirai même que, d'un certain côté, l'analyste n'est jamais complètement analysé, pour la simple raison qu'il est homme, et qu'il participe lui aussi aux mécanismes imaginaires qui font obstacle au passage de la parole. Il s'agit pour lui de ne pas s'identifier au sujet, d'être assez mort pour ne pas être pris dans la relation imaginaire, à l'intérieur de laquelle il est toujours sollicité d'intervenir, et de permettre la progressive migration de l'image du sujet vers le S, la chose à révéler, la chose qui n'a pas de nom, qui ne peut trouver son nom que pour autant que le circuit s'achèvera directement de S à A. Ce que le sujet avait à dire à travers son faux discours trouvera d'autant plus facilement un passage que l'économie de la relation imaginaire aura été progressivement amenuisée.

想像的關係におちいらぬためには、自我を持たないことが理想なのだと言わなければならない。しかしこれは分析医も人間であるという単純な理由で不可能である。

Si on forme des analystes, c'est pour qu'il y ait des sujets tels que chez eux le moi soit absent. C'est l'idéal de l'analyse, qui, bien entendu, reste virtuel. Il n'y a jamais un sujet sans moi, un sujet pleinement réalisé, mais c'est bien ce qu'il faut viser à obtenir toujours du sujet en analyse.¹⁾

精神分析の目標を患者の弱い自我を分析医の自我に合わせて補強し、強い自我を確立するところにおく自我心理学派の自我論の対極がここにある。自我とは想像的疎外の産物であり、完璧に実現された主体というものがあるとしたら、自我をもたないだろうと語るとき、ラカンはもちろん、フロイトの死後、世界の精神分析界の主流となった自我心理学を批判しているのである。

以上主にシェーマLを分析状況の基本構造を示すものとして解釈してきたが、ラカンのシェーマは多義的であり、さまざまな解釈を許容するものであることはいままでのままだ。『ラカンの世界』における佐々木孝次のように、このシェーマをエディプス・コンプレックスに適用すれば、 a は子、 a' は母、Aは父となるだろう。基本的な意味さえ正確におさえておけば、そのあとの解釈は読者一人ひとりの創意工夫にまかされているともいえよう。だから、この小論では私なりの解釈を示してきたが、他の解釈を排除するものではないのはもちろんのことである。

註

1) シェーマLは、*Ecrits* の P.53, *Séminaire, livre II, texte établi par Jacques-Alain Miller, le*

moi dans la théorie de Freud et dans la technique de la psychanalyse (以下, SII, と略す) の P. 284, *Séminaire, livre III, texte établi par Jacques-Alain Miller, les psychoses* (以下, SIII, と略す) の P.22. などに見られる。Seuil:

- 2) SIII, P.23.
- 3) *Ecrits*, P.429.
- 4) SII, P.120.
- 5) 鏡像段階を三段階にわけるとの解釈は, J.-B. Fages, *Comprendre Jacques Lacan*, Privat, に見られる。
- 6) *Ecrits*, PP.93-94.
- 7) *Ibid.* P.96.
- 8) *Ibid.* P.94.
- 9) *Ibid.* P.97.
- 10) 鏡像段階の理論からすると, 鏡のない社会では自我の形成はどのようにしておこなわれるのかという素朴な疑問がおこるが, 古代ギリシャのナルキッソス神話が示すように, 水面にうつった姿などが鏡像の代理をしていたと考えられる。なお, 近代的な鏡の生産と, 近代的自我の誕生とは無縁ではありえないだろう。
- 11) SIII, P.50.
- 12) *Ecrits*, P.95.
- 13) 小出浩之, 『シニフィアンの病い』, PP.24-25, 岩波書店
- 14) SIII, P.182.
- 15) SII, P.287.

(昭和63年 7月21日受理)

(昭和63年10月12日発行)

